

野外教育の再検討 —日常生活に野外教育を埋め戻す—

福畑 皓生
(信州大学)

【はじめに】

現在、野外教育は学校教育の一部として実施され、そこで行われるプログラムは多様化している。このように制度化・プログラム化された野外教育はどのような課題を持ち合わせているのだろうか。本論文では、野外教育の起源や本質を明確に理解したうえで、現行の野外教育の制度化・プログラム化された面について、一度批判的な立場をもってそれを再検討し、そこにある課題の明確化と打開策の考察をすることを目的とする。そのために、「自然」という言葉の意味について再考したうえで、野外教育の持つ本質的な特徴を持ちながらそのフィールドを日常生活の中にそれを埋め戻すことはできないのかを考える。

【野外教育とは】

野外教育の代表的な概念図の一つに、「野外教育の木」と言われているものがある。この概念図の中で、二つの大きな要素が冒険教育と環境教育であった。冒険教育は、教育目的をもって冒険を行うものを指し、環境教育は自信を取り巻く環境に関心や疑問を持ちその解決方法を考えて、行動に移す過程の中に教育目的を持ったものを指す。よってここでは、冒険的要素と課題解決的要素を併せ持った教育が、野外教育と言える。

【野外教育と日本人】

過去、日本の野外教育の源流は冒険的要素と課題解決的要素を併せ持つ修験道であると論じられた。そこに、アメリカを中心とした海外からキャンプなどの文化が混同し、今ある野外教育の形となった。しかし日本人は現在でも、森林を多く持つことや自然災害が他国よりも多いことから、自然に対して畏敬し、調和を図ろうとする自然観を持ち合わせている。

【野外教育と自然】

現在、日本に人間の手が全く加わってない場所はほとんどない。これは、辞書などで説明されているところの「自然」はほとんどないことを意味するところが考えられる。逆に、人間を含めた天地万物を「自然」と捉えればすべてが自然であるとも言える。ここから野外教育がそのフィールドを

展開する可能性は見出せないか。

【野外教育と教育】

フレイレは、「被抑圧者の教育学」において、教育に潜む抑圧状況には非人間化が危惧されると説いた。野外教育の中のプログラムにも抑圧状況が内在しており同じことが言える可能性がある。イリイチは、「脱学校論」において、学校という制度によって内発的動機付けが失われていると説いた。この制度という面で、野外教育もまた内発的動機付けが失われている可能性がある。このように学校教育の中での課題は野外教育でもまた同じことが言え、それを考える必要がある。

【野外教育という文化装置】

非日常を生み出す文化装置として、ディズニーランドは非日常という時空間を提供しているが、それは一つの商品として日常の中で消費されている。これは野外教育にも同じことが言える。先にあるように、野外教育の源流は修験道にあり、それは非日常体験の中に教えを乞うものである。その「非日常性」が、プログラムが提供されていく過程で同じように消費されている。この「非日常性」の消失によって、野外教育の持つ本質をも失いかねない。

【市街地というフィールドで】

冒険は危険が伴うことをあえてすることを意味する。ここで意味する冒険は、室内でもできると言える。そして、現在解決すべき課題は身近なところにあるものが多い。冒険的要素と課題解決的要素を併せ持つ野外教育は市街地において十分可能ではないか。

【おわりに】

野外教育は、制度が整備され、プログラムが確立されていけばいくほど、そこに課題が浮き彫りとなる。野外教育の要素を日常生活の中に求めれば、それらを払拭することが出来るのではないだろうか。元より、日常生活には冒険や課題解決があふれている。それらに着目することがこれからの野外教育を考えるうえで必要となってくるのではないか。